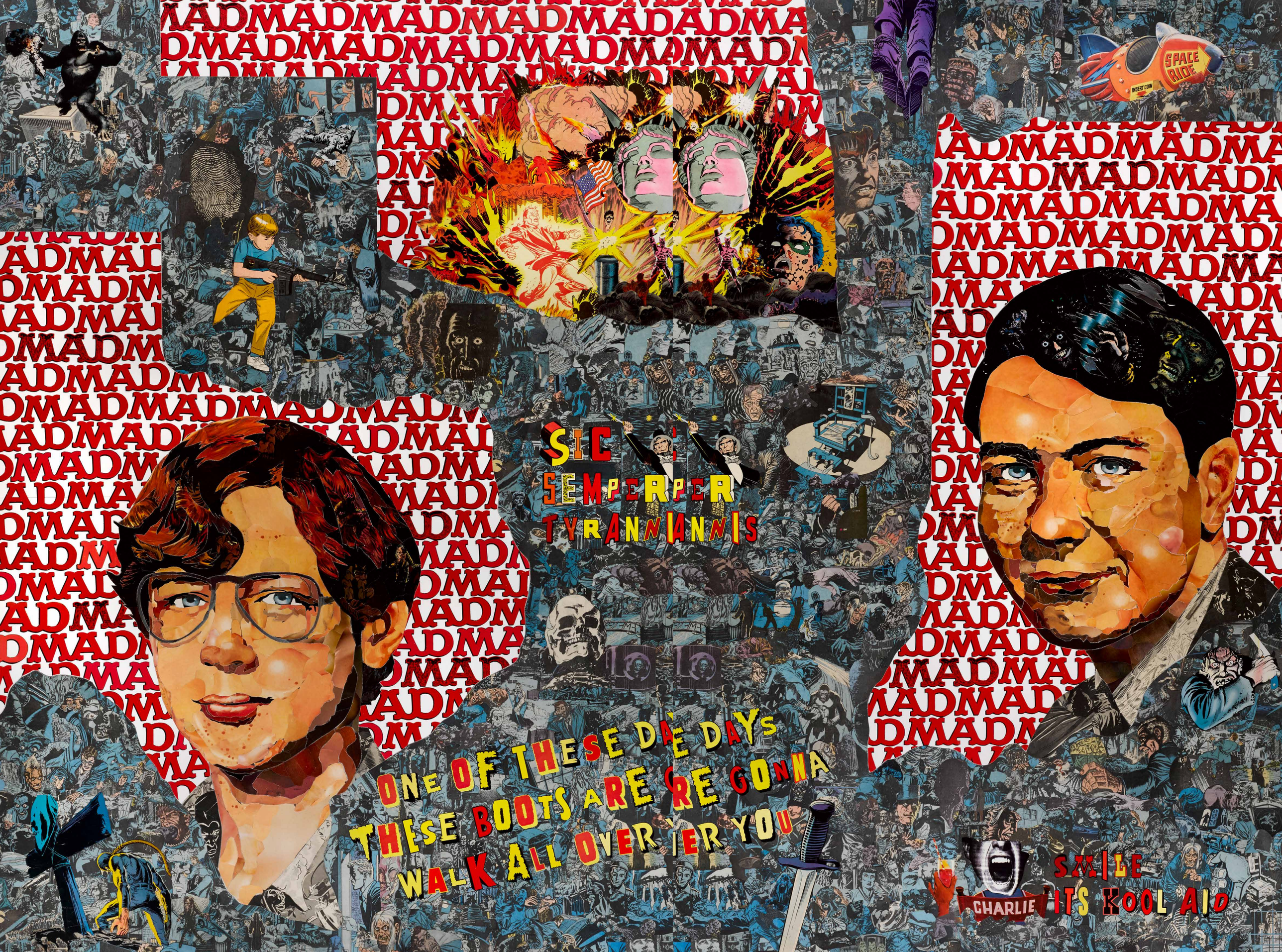
MAD
SPACE RIDE
INSERT COIN
SIC SEMPER TYRANNIS
ONE OF THESE DAYS
THESE BOOTS ARE GONNA
WALK ALL OVER YOU
CHARLIE
SMILE
IT'S KOOL AID

Ben Turnbull

STREET ARTIST IN UK **04**

Photo. **MMM**
Interview. **Muneyoshi Nakanishi**
Translation. **Shouta Hata**

自分への怒りや苦痛を製作の源に
アメリカンコミックをコラージュし、
凝縮された攻撃性を解放する

バンクシーの「Santa's Ghetto」がある場所

昔は、カーナビーストリートとソーホー周辺にあった空きスペースで展示会をやっていたんだ。僕らはかつてバンクシーの「Santa's Ghetto」がある場所の反対側で展示会を開いていたから、よくリーフレットとかチラシを彼らと交換したりしていたよ。縁もあってか、数年後にバンクシーが Lazarides Gallery で開催していた僕の展示「US vs Them」の「Every Home should Have One」という作品を観てくれたらしいんだ。それがオックスフォードストリートの Santa's Ghetto にコレクションされることを望んでいたよ。

自分の怒りや苦痛を源に

自分自身を表現するために、何らかの形のトラウマを経験しなければならない。それは何らかの方法で僕を怒らせた本とか、そのようなソース資料を使う方法でもよい。それは現代的な事象でもいいし、または僕の癇に障ってこびりついている歴史の一節である可能性もある。こういう感情が僕をいつも突き動かすんだ。その作品に最初から作る理由がなければ、その作品を作る必要は無いと考えている。アートは紛れもなく贅沢ものであり、俗世とは無関係でさえあるから、鑑賞者にとって現実味を持たせるためには、自分の怒りや苦痛を源にする必要がある。

無意識のうちに体験をさらに拡張するために

2019 年、マニフェストデシメーションというプロジェクトの一部で、「Once Upon A Time In America」という作品を作った。これを作ったのがちょうど自身のキャリアの頂点の時期だった。僕はそれまでに 10 年ぐらいコラージュ作品を作ってきたが、そのときは適切な情報のレイヤーを使った技法をマスターすることに夢中になっていたんだ。そして、皮肉や風刺を入れることにより、作品としてさらに高いレベルに引き上げられた。特定の触媒を通して歴史の一節を語るというコンセプトだ。そのため、「マニフェストデスティニー」とネイティブアメリカンの大量虐殺は、何千もカットしたカウボーイコミックを介して再構築したんだ。ラシュモア山にある建国の父に代わり、ネイティブアメリカンの肖像画を作成し、フランクバウムズの「オズの魔法使い」から「虹の彼方に」をソース資料として使用しながら、戦いの最中にあるラシュモア山の状態を表現した。つまりは、無意識のうちに体験をさらに拡張するために、作品におかれた比較対象となる要素を忍び込ませたんだ。

実行に移したら最大 1 年の禁固刑

2009 年に、「Kids Have Everything These Days」という作品で銃犯罪に関する社会風刺をしようとした。古典的なコインスロットとツイストメカニズムを使った自動販売機型の作品だった。子供たちの小遣いで簡単に買えるレプリカ銃をコンビニやお菓子屋さんからかき集め、その自販機の中に敷き詰めた。実際にレプリカ銃が買えるわけではなく、ロンドンの学校の近くの店の外に置き、カメラを仕込み子供たちの反応を記録するというアイデアだった。彼らの反応を見たかっただけなんだ。そのプロジェクトが宣伝され始めてすぐに、スコットランドヤードに注目されてしまい、扇動行為だとされ、実行に移したら最大 1 年の禁固刑が科せられるとの通告を受けたため中止せざるを得なかった。また運悪く BBC に取り上げられてしまい売名行為だと揶揄されるまで至ってしまった。真に伝えたいことから事態は反れてしまいコミュニケーション上のすれ違いが起きてしまったのだ。自分は社会に向けた映し鏡を掲げているという真言に頼る他なかった。ただの伝令役を責めないで欲しいね。

凝縮された攻撃性を解放する

道具は何でも使う。洒落た言い方になっちゃうかもしれないけど、イギリスの天気のように使う素材はコロコロ変わる。プロジェクト毎に新しいメディアを選べないとなると、むしろそっちの方が耐え難い。常に自分の選択肢の幅を広く持ち、次のプロジェクトがどのようなものになるのかわからない新鮮さを保つようにしている。漫画の匂いや触覚が好きで、お菓子の包装を解いて中身をはさみやメスで食い尽くす感じがする。彫刻（学校の机などに）もいいと思う。凝縮された攻撃性を解放することができるからね。引っ付いた古いガムや落書きをかき分けてこう彫るんだ：「ベンはここにいた!」

テキストから受ける感動の方が自分のイメージを膨らませる

2019 年に Flying Leaps の活動に参加しはじめた。彼らは英国中の掲示板にアートワークを貼り付けていて、ジェレミー・デラー、マーク・ティッチナー、マーカス・ハーベイ、ピーター・ケナードなどの、僕が尊敬して止まないアーティストの作品を取り扱っていた。どういうわけかハーベイと一緒に展示するよう依頼されたときは興奮したよ。誰に影響を受けているかという面では、言葉や物語に夢中になりがちだから、執筆家の方が多いかもしれない。テキストから受ける感動の方が自分のイメージを膨らませるからね。特に Hubert Selby Jr からは、どのビジュアルアーティストよりも多くのことを学んだ。あと、ライアン・レオン（Wasting Talent を書いた作家）は現代のブレット・イーストン・エリスだと思っているよ。

計画を練ることは大事な制作段階

初期の段階は特に楽しい。隠された財宝を探し回る感じさ。アイデアや集めた情報との接点を探し、それに合う素材を狩り出していく感じ。計画を練ることは大事な制作段階だよ、特に 1 つの作品に 3 〜 4 か月を費やす場合はね。そのあとの作業も大変だから、初期衝動の再確認も含めて注意しながら、一瞬も無駄にしないように。

すべてのエネルギーを自分の作品のために使い

若いアーティストはギャラリーの権威主義にすべてのエネルギーを奪われている。奴らは吸血鬼のように善意、正直さ、誠実さのすべてを吸い尽くす。さながらハイエナのようにアートフェアをウロウロして、ハッシュタグ / ミートゥー / アートマフィア要素を持つ作家に噛みついてくる。人生は一つだから、自分が何をすべきか、いつそれをすべきかを言われるがまま従い時間を無駄にするのではなく、自分自身に忠実でいよう。アメリカンミュージッククラブってバンドの Johnny Mathis' Feet って曲を聞いてごらんよ。すべてのエネルギーを自分の作品のために使い、誰が何を言おうとあるべき形に作品を収める。危険なやり方かもしれないが、長期的には満足するだろうし、僕は死の床で言うだろうよ「自分のやり方でやりきった」ってね。誰も信じないで自分の道は自分の作品に委ねるしかない。己や他の誰でもなく。

酒の密売所のような雰囲気のパブ「Guinea Grill」

バークレースクエアのそばにある「Guinea Grill」というパブが大好き。そこは酒の密売所のような雰囲気があって、知る人にしか分からない隠れたダイニングルームが後ろにある。まるでラムチョップの朝食を注文するクレイ兄弟のような気持ちなる。ハイソな場所さ。

12 年に渡って作った作品を集結

サーチ・ロンドンのメインギャラリーでこれまでで自身最大の展示会「American History RemiX」を開催したんだ。ニューフロンティアの誕生、2 つの大戦、ベトナム、9.11、グアンタナモなどの光景を取り入れた 12 年のアメリカンヒストリー × プロジェクト、コロンバイン、そしてトランプ時代まで、ギャラリーシーンから離れて 12 年に渡って作った作品を集結した。この作品を通して現代のパンデミックと世界的な恐慌状態はどう見えるか。初期と同様のアプローチで現代を見つめて、同時並行して題材と向き合うため、精神分裂を起こしそうになる。アメリカをテーマにしてたプロジェクトを継続しつつ、より個人的なベクトルも介在しているんだ。